

使徒の働き13章42－52章「みことばを受け入れる人、拒む人」

1A みことばへの飢え渇き 42－43

2A 群衆の救いへの妬み 44－49

1B 神の恵みへの反発 44－45

2B ユダヤ人の頑なさによる異邦人の救い 46－49

3A 聖霊の喜び 50－52

本文

使徒の働き 13 章を開いてください。私たちの学びは、前回、41 節まで来ました。パウロが、ピシティアのアンティオキアのユダヤ人会堂における、福音説教で、イエスが、預言者たちが言われているように、ユダヤ人指導者たちによって殺され、しかし、ダビデに約束されたように、確かに、よみがえられたということです。そして、この方によって罪の赦しを与えられ、信じる信仰によって義と認められるということも宣べました。それから、これを信じがたいこととして受け入れないことさえ、預言者によって警告されていることも話しました。

そして今晚は、その続きです。神のことばを、どのようにそこにいる人々は聞いて行ったのか、反応、応答はどうか？について見ていきます。

1A みことばへの飢え渇き 42－43

⁴² 二人が会堂を出るとき、人々は、次の安息日にも同じことについて話してくれるように頼んだ。⁴³ 会堂の集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神を敬う改宗者たちがパウロとバルナバについて来たので、二人は彼らと語り合い、神の恵みにとどまるように説得した。

人々の反応は、強い関心です。「次の安息日にも同じことについて話してくれるように頼んだ」と言っています。彼らの方から、神のみことばを聞きたいという渴望です。おそらく、彼らは、復活の主イエスに出会った、エマオの村に歩いていた弟子たちと同じでしょう。「ルカ 24:32 道々お話しくださる間、私たちに聖書を説き明かしてくださる間、私たちの心は内で燃えていたではないか。」心が、みことばを聞いている時に燃えていたのです。

私たちが、使徒たちの教会から、今の教会のあり方を学ぶというのが、使徒の働きを学ぶことにした理由であることを、始まりの時にかつてお話ししました。私たちは、ここから、「聖書の、神のことばに、人々が飢え渇きを呼び起こす」ということが、教会の使命であるということです。

かつて、私たちは、子どもたちに聖書を教えていた時期があります。教会学校とか、日曜学校と

いうと、子どもに、いかにイエス様のこと、聖書のことに興味を持ってもらえるか、手を変え品を変え、いろいろ工夫することが、教会学校の教師の務めであるかのような空気が、日本の教会にあります。しかし、私たちはそう教わりませんでした。「聖書自体が、とても面白い」ということです。聖書自体をそのまま教えていくことが、子どもたちによって、イエスを主として求め、この方に従いたいと願うようになる、というものです。ですから、問題はいかに面白くするか？ではなく、いかに、すでに面白い神のことばを、面白いままで、そのまま伝えることができるか？なのです。

これは大人でも同じです。みことばそのものに対する飢え渴きを、引き出すような教会が、主がみこころとしている教会です。

そして次に、「**多くのユダヤ人と神を敬う改宗者たちがパウロとバルナバについて来た**」とあります。この時点では、異邦人ではなく、ユダヤ人あるいは改宗者が、ついて来ています。改宗者とは、血筋は異邦人であっても、男性ならば割礼を受けて、モーセの律法を守って、改宗手続きをした者たちのことです。彼らがついて来ていますが、パウロとバルナバの話を聞いたのは、「**神を恐れる方々**」とパウロが、説教中に呼びかけた異邦人たちもいます。彼らは今、まだ、付いてくる人々には含まれていませんでした。蚊帳の外に、ある意味、置かれていたのです。また、自分たちも、外野だと思っていた事でしょう。

そして、二人が、「**神の恵みにとどまるように説得した**」とあります。神の恵みについて、多くの人には、救われる時に必要なものでしょ？で終わらせてしまっています。いいえ、神の恵みは、信じて、信じだ後も、留まるべきものなのです。

チャーリー・カークが師と仰いだ霊的指導者の一人が、彼の追悼式で言ったことがあります。「チャーリーは、天国にいることを知ってほしいです。それは、彼がすばらしい父であり夫であったからではない。彼が、何百万もの大学生たちを暗闇から救い出したからでもなく、人々の考え方を換え、国を救済するための票を集めたからでもありません。そして、彼が自分の救い主のために、命を捨てたからでもありません。彼が天国にいるのは、救い主が、チャーリー・カークのために、ご自身のいのちを捨て、犠牲にされたからです。」¹

そうなのです、「自分が主のためにしたこと」ではなく、「主がいかに、自分にしてくださっているのか」に、留まっていること。自分がどれだけ価値があるのかとかではなく、主がどのような方で、すばらしい方なのかについて、知っていくこと自体が、神の恵みにとどまることなのです。ペテロは、第二の手紙の最後に、こう言いました。「3:18 **私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長なさい。**」

¹ <https://youtu.be/xriAmnDtaHw?t=371>

そして、「**とどまる**」ということが、いかに大事かを思います。興味を持っていく人々は多いです。決断する人たちは、その中でごくわずかです。さらに、言わせていただくなら、「**継続する**」人たちは、もっとさらにわずかになります。決心することと、とどまることには大きな隔たりがあります。私たち教会が、人々をキリストに決心するように説得することも大事ですが、この方にとどまるように説得することが、いかに大事かを思います。(ヘブル 3:12-14 参照)

2A 群衆の救いへの妬み 44-49

1B 神の恵みへの反発 44-45

⁴⁴ 次の安息日には、**ほぼ町中の人々が**、主のことばを聞くために集まって来た。⁴⁵ しかし、この群衆を見たユダヤ人たちはねたみに燃え、パウロが語ることに反対し、口汚くののしった。

2019 年にトルコに旅した時、アンティオキアの町と、この会堂の跡に踏み入れました。相当大きな町であることが分かりました。当時、15 万人はいたのではないかとされています。ということは、「**ほぼ町中の人々**」と言っていますから、15 万人近い人たちが集まって来たということになります！この中の多くが、異邦人だったに違いありません。

そして、「**この群衆を見たユダヤ人たちはねたみに燃え**」とありますね。ここで、大きな霊的覚醒が起こっている！として、喜んでいないのです。激しく妬みにかられて、怒っているのです。自分たちの仲間、ユダヤ人たちが従っていくのであれば、許容したことでしょう。けれども、今、町中の人々がやってきて、群衆がやってきているのを見て、怒っているのです。

これで思い出すのが、ジーザス・ムーブメントです。1970 年初頭、ヒッピーと呼ばれていた若者たちが、カルバリーチャペルに一気に押し寄せた時、既存の教会から、いろいろなことを言われました。牧者チャックは、近所の教会からやってきたご夫婦から、こんなこと言われたそうです。「私たちの教会の牧師が、あなたには飲酒の問題があると。」チャックは、「もっとも刺激のある飲料物で口にしたのは、無調整の牛乳ですよ。」そうなんです、彼はお酒やタバコについては、個人的には、全く受け付けない人だったのです。

主が行われることについて、その恵みの働き、気前の良さを見て、不満を言っていたのが、パリサイ派だったことを思い出してください。罪人や取税人たちが集まって、食事をしているのに不満を持っていたのは、彼らです。それに対して、主が、失われた羊、失われた硬貨、そして失われた放蕩息子のことを語られました。当然、見つかったら喜ぶではないか？ということです。その、主のこころを見失っていたことを、示されました。

そして主が、ナザレの会堂で語られた時に、彼らはイエスを信じませんでした。それで主が語られたのは、異邦人に対する主の取り扱いでした。「ルカ 4:25-27 **まことに、あなたがたに言います。**

エリヤの時代に、イスラエルに多くのやもめがいました。三年六か月の間、天が閉じられ、大飢饉が全地に起こったとき、26 そのやもめたちのだれのところにもエリヤは遣わされず、シドンのツァレファテにいた、一人のやもめの女にだけ遣わされました。27 また、預言者エリシャのときには、イスラエルにはツァラアトに冒された人が多くいましたが、その中のだれもきよめられることはなく、シリア人ナアマンだけがきよめられました。」異邦人たちが救われていることを聞いて、彼らは憤りに満たされたのです。主が、そこまで心が広く、恵みに満ちていることが、どうしても、受け入れられませんでした。言い方を変えれば、自分たちの努力に主が何か、報いてほしいと思っているからです。けれども、すべて恵みによるのです。何も誇るべきことはありません。

ですから、弟子たちに対しても、五時から雇われた者たちが同じ賃金、一デナリを始めに受け取って、初めから雇われた人々が文句を言っているところにも、表れていましたね。また、十二弟子たちの中にも、そうした主の寛大さに気づかないでいました。「マル 9:38-40 ヨハネがイエスに言った。「先生。あなたの名によって悪霊を追い出している人を見たので、やめさせようと思いました。その人が私たちについて来なかったからです。」39 しかし、イエスは言われた。「やめさせてはいけません。わたしの名を唱えて力あるわざを行い、そのすぐ後に、わたしを悪く言える人はいません。40 わたしたちに反対しない人は、わたしたちの味方です。」

パウロは、ローマで囚人として捕らえられている時に、主にある喜びに満たされていました。なぜ喜ぶことができたのか？それは、主の、この広い心を自分のものとしていたからです。パウロが捕らえられていることで、なんと、彼の名を貶めながら福音を語っている輩がいました。今でも、あるあるですね、他の教会の人々の働きを貶めて、自分の働きに正当性を持たせようとしています。けれども、パウロが見ていたのは、もっと大きなことでした。そう、イエスが宣べ伝えられていたことです。「ピリ 1:17-18 ほかに人たちは党派心からキリストを宣べ伝えており、純粋な動機からではありません。鎖につながれている私をさらに苦しめるつもりなのです。18 しかし、それが何だというのでしょうか。見せかけであれ、真実であれ、あらゆる仕方でキリストが宣べ伝えられているのですから、私はそのことを喜んでいきます。そうです。これからも喜ぶでしょう。」私たちは、主の持つておられる喜び、救いの働きについての喜びを見失ってはいけません。

そして、「パウロが語ることに反対し、口汚くのしった」とあります。これは、かなり深刻です。主がなされるわざについて、罵った者たちについて、イエスが聖霊に対する冒瀆であると語られたことがあります。「ルカ 12:10 人の子を悪く言う者はだれでも赦されます。しかし、聖霊を冒瀆する者は赦されません。」主ご自身について悪く言っても、悔い改めれば赦されます。けれども、その力強い証しが示されているのに、それに反対するということは、自らを滅びに定めてしまっているということです。

これを今の私たちについて言うならば、私たちについて悪く言う人たちがいて、それは、罪であり、

悔い改めが必要です。罪が赦されます。しかし、主ご自身について、聖霊の証しによって示されたことについて、それを明確に拒むのであれば、その人には罪の赦しが残されていないのです。唯一の罪の赦しの備えである方を拒んだのですから、残りは恐ろしい神の御怒りしかないのです。

2B ユダヤ人の頑なさによる異邦人の救い 46－49

⁴⁶ そこで、パウロとバルナバは大胆に語った。「神のことばは、まずあなたがたに語られなければなりません。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者にしています。ですから、見なさい、私たちはこれから異邦人たちの方に向かいます。

この順番について、神の予知とご計画があったことは、聖書の他の箇所から分かります。神のことばは、イスラエルに与えられていることは明らかなです。福音のことばも、ユダヤ人を始めとしています。「ロマ 1:16 私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」主ご自身が、「マタ 15:24 わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」とされていました。

ところが、ユダヤ人たち自身が拒む。そして、主はその恵みを、選ばれていなかった異邦人たちも救うというかたちで示されるという流れです。王子の婚宴の招待の時に、人々は断ったので、その席を埋めるために、「しもべたちは通りに出て行って、良い人でも悪い人でも出会った人をみな集めたので、披露宴は客でいっぱいになった。」とあります(マタ 22:10)。

そして、ぶどう園の喩えが、最もはっきりしています。農夫たちが、主人のぶどう園を見守っていたが、収穫の時に遣わされたしもべたちを、捕えて、打ちたたき、殺してしまいました。それで主人は、「私の息子ならば敬ってくれるだろう」と思いましたが、農夫たちは、「あれは跡取りだ。さあ、あれを殺して、あれの相続財産を手に入れよう(マタイ 21:38)」と企めました。それで、主は、ユダヤ人指導者らに対して、主人は農夫たちをどうすればよいだろう？と尋ねられて、彼らは答えるんですね。「マタ 21:41 その悪者どもを情け容赦なく滅ぼして、そのぶどう園を、収穫の 때가来れば収穫を納める別の農夫たちに貸すでしょう。」この別の農夫というのが、異邦人たちのことです。

そして、主は、召天される前に弟子たちに宣教命令を出されましたが、失われたイスラエルの羊ではなく、「あらゆる国の人々を弟子としなさい。(28:19)」とされているのです。主は元々、アブラハムに対して、彼によってすべての部族が祝福を受けると約束されていて、キリストにあってすべての国の人々に福音が伝わるようにされていましたが、それを、ご自分の民が受け入れないで拒むことによって、実現していくというご計画にしていたのです。

もちろん、それは神が無理やり、イスラエルを頑なにさせたということではなく、自分たちで高くなにしました。ロマ 10 章にそれが書かれていますし、ここにおいても、パウロがはっきりと言っている

すね。「あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者にしています」ということです。

そうですね、私たちは、福音を伝えることにおいて、峻厳な現実があります。それは、主は、たとえ拒むことにおいても、強いらせてみことばを受け入れるようにはされないということです。人は、神のかたちに造られて、神ご自身が自由意志を持っておられるので、人にも自由意志を持たせています。ですから、人が受け入れるのであれば、それを尊重し、受け入れないで、拒むのであれば、それも尊重しなければいけません。

だから、永遠の滅び、地獄に送られるにも、それは自分自身がそう決めているからなのです。ここが大事ですね。福音によって救われることがはっきり語られているのに、それを拒むということは、自らが滅ぶことを選び取っています。そうでなければ、地獄に行くことはないのです。「そんなの、ひどいことだ！」というならば、悔い改めて、主イエスを自分の救い主として受け入れればよいのです。それが嫌だから、この方を礼拝する天に入らないことは、理にかなっています。

⁴⁷ 主が私たちに、こう命じておられるからです。『わたしはあなたを異邦人の光とし、地の果てにまで救いをもたらす者とする。』⁴⁸ 異邦人たちはこれを聞いて喜び、主のことばを賛美した。そして、永遠のいのちにあずかるように定められていた人たちはみな、信仰に入った。

47 節の「異邦人の光」は、イザヤ書 49 章に書かれている預言です。イザヤは、40 章以降で、数多く、諸国に対する救い、また遠い島々に対する救いの幻を受けています。他の預言者たちも、イスラエルを通して、諸国へ救いが及ぶことについて語っています。それが今、実現しているのだと宣言しています。

それで、これまで排除されていると思っていた異邦人たちが、喜んで、「主のことばを賛美した」とありますね。そうです、神を敬っていたけども、その相続にはあずかれないと思っていました。イスラエルだけのものだと思っていました。ところが、その恵みに自分たちも加えていただけているのだと知ったのですから、その喜びはひとしおだったのに違いありません。

そして興味深いのは、次の表現です。「永遠のいのちにあずかるように定められていた人たちはみな、信仰に入った」ということです。そう、これが福音宣教の現場です。誰かが信仰に入るのは、主がそのように定められているからです。「ヨハ 6:37 父がわたしに与えてくださる者はみな、わたしのもとに来ます。そして、わたしのもとに来る者を、わたしは決して外に追い出したりはしません。」父なる神が、永遠のいのちを与えるようにされている者たちが、イエスのもとに行きます。

異邦人が神のことばを受け入れるということは、ユダヤ人が受け入れるということよりも、はるか

に、はるかにハードルが高いはずですが。それでも、受け入れるということは、主ご自身の選びがあり、また聖霊の働きがあるからです。「ロマ 9:24 このあわれみの器として、神は私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださいました。」憐れみの器として、異邦人の中からも選んでおられます。したがって、私たちが福音を語る時に、信じさせるというよりも、主がそのようにされることを期待して、しっかりと一人一人に伝えるのです。

⁴⁹ こうして主のことばは、この地方全体に広まった。

ピシディアの地方全体に広まりました。ルカは、ある出来事が起こった後に、このように、みことばが広がったことを書き記しています。大事なものは、みことばであること。そして、主は、その広がりについて、一つ一つきっかけになっている出来事として用いておられるということです。

3A 聖霊の喜び 50－52

⁵⁰ ところが、ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町のおもだった人たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、二人をその地方から追い出した。

「神を敬う貴婦人たち」とは、ギリシア、ローマ文化にある異教的な慣わしや、男尊女卑の文化に嫌気がさし、女たちの尊厳が認められているユダヤ人の宗教にひかれていた人々のことを指しています。高い地位についている婦人たちがそれです。当時の文化では、男は愛人がいて、娼婦がいて、それから嫡子のための正妻がいるのが当たり前でした。そういった貴婦人や高い地位にいる人たちを扇動して、それでパウロとバルナバを迫害させました。

⁵¹ 二人は彼らに対して足のちりを払い落として、イコニオンに行った。

彼らは追い出されましたが、その時に「足のちりを払い落とし」とあります。これは主が弟子たちに宣教について教えておられたことです。「マル 6:11 あなたがたを受け入れず、あなたがたの言うことを聞かない場所があったなら、そこから出て行くときに、彼らに対する証言として、足の裏のちりを払い落としなさい。」主のことばを語らなければ、災いは自分に下りますが、その責任は果たし、災いはあなたがたに下ると言うことを示す、仕草です。

福音宣教というのは、こういう性質を持っています。語るところまでが、私たちの責務です。命じられていることです。けれども、語れば、それを聞く人々に責任があります。

⁵² 弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。

二人には迫害がありましたが、そのような敵対的な雰囲気のある中で、信じた人々がキリストの

教えに従っていったのです。そして彼らには喜びがありました。そして聖霊に満たされています。

なんとすばらしいでしょうか。迫害があっても、喜びなさい、大いに喜びなさいと主は弟子たちに言われました。私たちに与えられている良い知らせ、主のことばは、人々を喜びに満たします。神が、そしてイエスがそのように意図されているからです。「ヨハ 15:11 わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたが喜びで満ちあふれるようになるために、わたしはこれらのことをあなたがたに話しました。」この喜びは、環境に左右されません。状況に左右されません。神との関係にある喜びだからです。どんな困難があっても、喜んでいられるのです。